

文化

「よそのもの」「よのゆき」 民俗学者で歌人の折口信夫(昭道空、1883~1953)は、「よそ(外處・他處・別處)」のことを、「自分を中心として、其外のものを、差別的によそと見たのである。人を離れて、自分と無関係のものとして見る」と言ふ意と書いている(『萬葉集事典』)。

な ら 民俗通信

298 勺 穂子



この写真はコロナ前? コロナ後? 二魚谷東町の奈良女子大学前通りにて (奈良市)

満月に、古代から変わらぬものを思ふ。一方で意外に多い夜中の飛行機とその音量に驚く(以前より静かな気がするのはコロナの影響か)。

福寺の鐘であるといふ気が今まで時間がかかったし、耳新しく目新しく、ハレとして立ち上がつてくる。

▼よそのものすすめ

- ⑨テーマは大きく
- ⑩一ヵ所をほりさげる
- ⑪魅力を再確認してもらうこの取り組みを確立した柳田国男

り返し行いやさい。

日本の民俗学を確立した柳田国男

のではなく、自身でよく見かける氣をする。私のところでは、コロナ前にスマートフォンで撮りためた写真を確認すると、思いのほか、路上の鹿の写真を撮っていた。50頭ほどが、いつせいに町なかを疾走してニユースになつたのも、外国人観光客が過去最大数となる魅力を再確認してもらうこの取り組みを確立してもらつて、奈良の自然環境をみるとことだという。

物事に対峙(たいじ)する比喩(ひゆ)でもあるが、地元ではこれを繰り返し行いやさい。

見直される「民俗学」

(1875~1919)

62)の「郷土研究」ということ

「青年と學問」

岩波文庫)も確認したい。

「なるべく自分の家の門の前、垣根のへりから初めて、次第に外へ出

て行くこと。すなわちよくわかるものから解らぬものへ進む」と

と呼ばれた宮本常

一(1907~1981)は、『民

俗学のすすめ』

(河出書房新社)

で「民俗事象の捉え方・調べ方」10

項目をあげる。

①小さじように

項目をあげる

②村を全望する

③村の中をよく

見る

④カメラを利用する

⑤多くの古老に

聞も後追いすることがあつた。

▼事実を確かめる

今回の自粛期間中、「鹿せんべい

がもれなない鹿が街を徘徊(はいかい)し狂暴化?」といつたニュース

がネットを中心に駆け巡り、大手新

聞も後追いすることがあつた。

お差別されることが多かつたのに対し、後者は秩序外の「まれびと」的な位置で歓迎されるに至った。

「よそのもの」に対し「よのゆき」の持つ印象は、やや晴れがましいしかし、よのゆきの服を着て、よのゆきの顔をして、訪れる場所は、大抵よのゆきであるから、そこでは自己がよのゆきになる。つまり「よのゆき」と「よのゆき」は、ハレ(非日常)の裏表に過ぎないとこういふことになる。

▼よそのもの気づき
堺で生まれ育った私は、やはり今までに奈良のよのゆきだ。よのゆきにどうして毎日六時、十二時十八時などからか聞こえる鐘の音が、興

もぢうん、これのよのゆきだけの特権ではないが、生まれたときから口常(ケ)の中にそれらがあった

組みを、民俗学の視点で考えると、「よのゆきになつてませんか」と旅する民俗学者

と呼ばれた宮本常一(1907~1981)は、「文書の価値はもちろん軽んじないが、(略)つねに力を自身直接の観察に置くこと」

岩波文庫)も確認したい。

「なるべく自分の家の門の前、垣根のへりから初めて、次第に外へ出

て行くこと。すなわちよくわかるものから解らぬものへ進む」と

と呼ばれた宮本常

一(1907~1981)は、『民

俗学のすすめ』

(河出書房新社)

で「民俗事象の捉え方・調べ方」10

項目をあげる。

①小さじように

項目をあげる

②村を全望する

③村の中をよく

見る

④カメラを利用する

⑤多くの古老に

聞も後追いすることがあつた。

▼事実を確かめる

今回の自粛期間中、「鹿せんべい

がもれなない鹿が街を徘徊(はいかい)し狂暴化?」といつたニュース

がネットを中心に駆け巡り、大手新

聞も後追いすることがあつた。

▼事実を確かめる

今回の自粛期間中、「鹿せんべい

がもれなない鹿が街を徘徊(は